慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	土田杏村著 マルクス思想と現代文化
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.7 (1921. 7) ,p.1059(147)- 1060(148)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210701-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

増進と勞働者の人格的要求の尊重とが如何にして兩立し得るかの一事なりと謂へるを以てなり（八九二―三頁）。而して此問題の解決は博士の流通論出づるを俟つて始めて知る可きものたるなり。

マルクスの餘剰價値說を攻擊したる著者は又その基礎たる勞働價値說をも否定す。その論に從へばマルクスの價値說は冠履顚倒の論なりと謂ふに在り。蓋し吾人が勞働を費して物を生産するは其物に價値あるを以てなり。價値あるが故に之に勞働を費し、苦痛を伴ふ力作を代價として支拂ふ事を辭せざるなり。故に曰く『勞働は價値の源なりと云ふよりも、價値は勞働の源なりと云つた方が當を得て居るのであります』と。筆者は勞働價値說の缺點を指摘するに於て博士等の驥尾に附するものなりと雖も、唯茲に博士が價値なる語に依て解するところとマルクスの同語の用法とは同じからざる事を記せざる可からず。即ち博士に從へば價値とは「或目的に對して或手段が有する意味の度合」にして、全然一の主觀的判斷なるに、マルクスに於ては、價値は『商品の交換比率若しくは交換價値に現はるゝ共通物』なり。マルクスと雖も、價値を一の主觀的判斷と解する約束の下に於て論ぜば、恐らくその價値が社會的に必要なる勞働時間に依て定まると云ふ事を躊躇したるには非ざるべきか。

價値論餘剰價値論に於てマルクスを排したる福田博士も、「資本概念論に於てはマルクスに左袒して資本の一歷史的概念にして、これに絶對的範疇と云ふ方面の全然なき事を言明し（九一―四頁其他）。資本の最終的定義として「資本とは剩殖の用に供せらるゝ私有財産である」或は「資本とは其所有者が之を增加しようと云ふ意志を附與した私有財産の謂である」（一〇〇四―五頁）と云ひ、生産要具を以て資本となすの通說の非なる所以を反覆縷說す。而して資本概念の變遷並に資本概念混雜の由來と理由との說明せらるゝ事は最も詳細なり。此一段（八九五―一〇二四頁）はクニイス、メンガア、ボエム・バヱルクの記述と共に、資本學說研究者の必ず讀まざる可からざるところなり。

純然たる經濟理論以外に於て評者の益を得る事多かりしは專門技術的（とも謂ふべき）細目の記述の、特に甚だ詳かなる事是なり。例へば第十五章に於ける各種の耕作法の說明、第二十六章に於ける勞働の生理の說明、第二十七章に於ける勞働最能限率に關するレオ・フォン・ブッフの研究紹介第二十九章に於ける勞働契約に關する諸國民法々規の比較評論の如きは即ち是なり。又珍らしき主張にあらざるも、著者の適切奇警なる說明の爲めに、讀者の甚だ深き印象を受くるの實例は擧げて數ふ可からず。勞働と遊戲との別を論じて、遊戲の場合には「樂其外に在り」と云へるが如き（六〇六頁）は幾十百中の一例のみ。卷中收むるところの肖像及挿繪は舊の分冊版に比して新たに約二十を加ふ。（就中珍とす可きはアダム・スミスの母の肖像なり。）若し茲に一人のアルフレッド・マアシャルを加ふるときは、過去及び現在に於ける代表的經濟學者の肖像は悉く此書中に網羅せらるゝなり。（小泉信三）

土田杏村著　マルクス思想と現代文化

四六版四〇〇頁
定價二圓八十錢
佐藤出版株式會社

マルクス主義の經濟的世界觀に慊らずして、カントの批判哲學に其の歸趣を求めやうとするのが現代の傾向である。然し動もすると何等の理解も同情もなく一向に淺薄な唯物論を固守したり、或ひは徒に輕薄な理想論に安住しやうとする傾きがある。「我々が法律生活、經濟生活に於て不完全なる生活形態を持つて居るならば、其れは文化價値によつて批判せられ、人格性の尊嚴の完全に發揮せられざるものと見なければならぬ。」（本書前篇二〇六頁）Sein は Sollen に依つて導かれなければならない。而して人格性の尊嚴を十分に發揮し得る生産組織を完成することが人類文化の發展に最も必要なる一方面である。

本書は土田氏が「文化學的研究」の第二卷である。氏の所謂文化學若しくは文明學なるものが果して科學として設立し得るや否やに就いての明確なる説明は本書からは得られない。（後篇二頁以下）然し氏が絶えず人類文化の爲めに兎に角孜々として努力して居ることは敬服すべきことである。何事かなさんとする者は常に何等かの意味に於いて大なる理想論者である。（理想否定論をなすマルクスも人間としては矢張り大なる理想論者であつた。）此の點より見て氏が今後益々大なる理想論者たらんことを希望する。然しそれと共に一層史的研究と事實の攻究とを必要とする。本書は唯其の過程に於ける氏の勞作と見るべきものである。分ちて前後二篇とする前篇は「マルクス思想の文化學的批判」と題し、Dr. Gerhart von Schulge-Gäverniitzの "Marx oder Kant" を骨子として、それを解説したものである。然し解説と云ふよりも寧ろ著者の云はんと欲することの爲めに利用したと云ふ方が適當であるかも知れない。殊に哲學的方面に關しては極めて周到なる註解が附してある。其の爲めに却つて煩雑ならしめ、原著の如く明快に眞意を捕捉することが出來ない。其の點に於いて前篇は「諸地方での通俗講演と云ふよりも寧ろ「講堂内の講義」である。（序文二頁）後篇は「現代文化の文化學的批判」を題し「現代文化の基調としての象徴的精神」「文化に於ける人生觀の段階と均衡」「政治の創造的論理とエラン・ヴィタル」「政治に於ける批判哲學の功過」「現今三大闘爭と我が國策の建設」の五篇からなる。何れもそれだけで獨立して居る論文で、氏の文化哲學を實際問題に適應せしめんとしたものである。然し要するに各々通俗講演に過ぎない。それ以上を要求する讀者にとつては失望を感ぜしむるだけである。吾人は氏が其の文化學なるものを如何に體系づけるかを刮目して待つ。（野村兼太郎）

本位田祥男著　消費組合運動
芝三田國文堂發行
四六版四百頁
定價金貳圓五拾錢

資本家の取得する利潤を以て不當なりとする議論は決して新しきものにあらず。營利主義の經濟組織が屢々思想家の非難攻撃の的となれるは經濟思想史の研究家の周知せる所なり。今この利潤廢止の思想を實際社會組織に應用せんとしたる試の最も成功せるものは消費組合なり。本書は營利主義の害惡たる利潤の廢止を目的とする消費組合運動を歴史的に論述したるものにして、先づ筆を産業革命に起し、その發展の結果たる現代の經濟組織が極端なる營利主義にありて「米を作るにも米を作つたと云ふ歎よりも、多くの人の食糧を作つて社會に奉仕したと云ふ喜よりも、多くの金を得ると云ふ事が何よりの目的である。」と云ふが如き狀態に立ち到りて遂には「一方には物價の騰貴のために飢に泣く者あるにも拘はらず、他方には巨萬の利益を得て贅の限りを盡す者」のあるが如き自利的競爭主義の弊を釀せり。この弊害を矯め、相互扶助をその趣旨とする非競爭主義を採り、消費のための生産を必要する思想より生れたるものが消費組合にして、「消費組合は多くの組合員が各組合員の消費を目的とし或財貨を生産及分配するために任意に團結した」るものなりとせり。而して著者はこの組合が英國において最も發達せる有樣を記し、この組合がロバアト・オーエンの理想に發し、ロッチデールの組合より益々發達を遂げたる經路を詳説し、更らに獨逸ベルギーに於ける消費組合運動史を説述したり。

而して著者は消費組合を以て、販賣組織を整理し冗員を淘汰し、物價を低下し、經濟界を安定せしむると同時に精神的方面においては愛の欲求を滿足せしむる效果の存するものなりとせり。更らに消費組合の限界を論じたる後、生産管理權の問題を論じたり。著者は先づ産業管理權に對するウェッブの分類即ち（一）製造財貨の分量、種類、時、（二）生産過程の管理權、（三）勞働條件に關し、消費組合組織においては（一）及（二）を消費者の決定に俟つものとなし、この問題に對するコールの批評即ち（二）を生産者の手中に置かんとする論を論駁したり。著者はギル